◆ 巻頭言

ガジマル

知念　ウシ

私が育った集落の入り口には大きなガジマルの木があった。それを通り過ぎて集落の内側に入ると、なんだか守られているような気がした。今私は、同じ地域の違う場所に家族をつくって住んでいる。ふと気がつくと、そのガジマルはなくなっていた。

従来、沖縄のどの集落にもガジマルがあったはずだ。その地域の歴史に寄り添う古木には妖精のキジムナーが住むと信じられていた。現在では、戦争や開発などで姿を消したものが多い。

自分の家の前にガジマルの木を植えたい、と思うようになったのは、あの安心感が懐かしいのと、ガジマルの根の強さのように、沖縄の歴史へのつながりを実感したいこと、そして、「ガジマルのある家には子どもが帰ってくる」という言い伝えがあることを知ったからだ。子を持つ親となって、子どもたちには毎日無事に帰ってきてほしい。また、成長するにつれ、さまざまなことに出会い自分を見失っても、自分らしい自分となって、根っこのあるところへと戻ってきてほしい。

ある日雨の後、アスファルトを破って生えてきたガジマルの若木を見つけた。引っこ抜いてきて鉢に植えたら、近所の人がそれを見て、どこからか、高さ50センチほどの見事な枝ぶりの盆栽をもらってきてくれた。というわけで、我が家のガジマルは２本になった。

私たちの家は、夏の涼しい風が通り抜けるように、南側に大きく開いた、仕切りのない造りだ。そのせいか、近所の子どもたちがよく遊びに来る。特に雨の日は児童館のようだ。チェス、カードゲーム、パズル、レゴ、読書、絵を描いている子もいる。私もその中で原稿を書いている。晴れた日にはガジマルのそばで、子どもたちは自転車に乗ったり、キャッチボールをしたり、おうちごっこをしている。

「ちょっと帰ってきすぎかも･･･」と、夫と私は笑っている。

PROFILE

知念 ウシ
（ちにん うしい）

1966年那覇市首里生まれ。むぬかちゃー（ライター）＆心理カウンセラー。沖縄の日常生活から見えてくる政治･文化シーンを書く。県立博物館を拠点に琉球語の復活･継承に取り組む「しまくとぅばプロジェクト」の企画運営委員。共著に『人類館』『あなたは戦争で死ねますか』『植民者へ』など。